

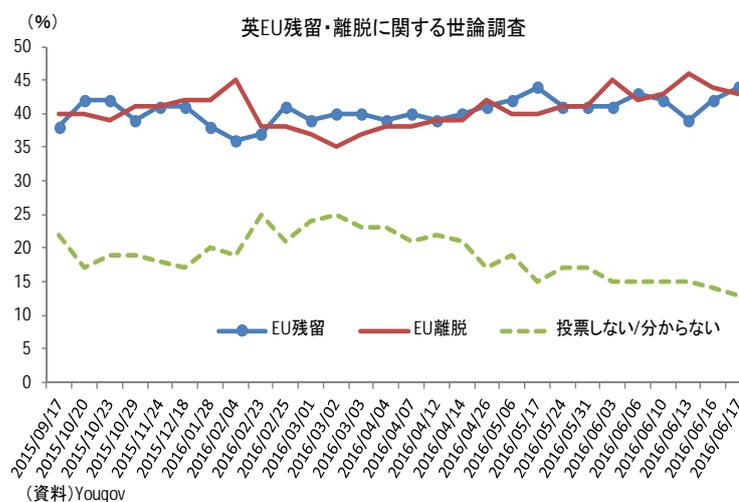
みずほマーケット・トピック(2016年6月20日)

英議員殺害で思い返されるアンナ・リンド事件

各種世論調査によれば、16日に発生した英下院議員殺害事件を契機として、同氏への同情票から残留派が支持を伸ばしている。今回の事件を受けて即座に思い出されるのが2003年9月10日に起きたスウェーデンのアンナ・リンド外相刺殺事件。同年9月14日に同国のユーロ導入を問う国民投票を控えていたところ、導入賛成派の旗手であるリンド外相が刺殺された。しかし、この事件を経ても、スウェーデン国民投票では反対派が大差で勝利し、スウェーデン国民における通貨ユーロへの疑念が深いものであることが確認された。とはいえ、今回の英国のケースは、スウェーデンのケースに比べて賛成・反対が拮抗しているため、同情票で覆る芽はある。但し、このまま残留派が勝利しても「議員殺害のはずみで勝利しただけ」というしこりは残りそう。また、万が一、離脱派が勝利しても、2020年5月の総選挙ではその選択の適否が争点にならざるを得ない。

～思い返されるアンナ・リンド外相刺殺事件～

先週末から今朝方にかけての為替相場ではリスク回避ムードの和らぎから円が売り戻されており、ドル/円相場は一時104.84円まで値を戻している。週末に公表された英国のEU離脱(Brexit)を問う世論調査において、残留派優勢の結果が伝えられたことが好感されている。16日に発生した英下院議員殺害事件の余波で、同氏への同情票から残留派が支持を伸ばしている模様だが、それでも勝負を決するほどの差が出ているわけではない。斯かる状況下、今週の金融市場は23日の国民投票の結果が判明するまでは右往左往することにならざるを得ないだろう(日本時間24日の午前中から昼にかけて大勢が判明する見通し)。



足許では議員殺害の影響が世論調査に出ているものの、当然のことながら、人命の犠牲が結果を変えるとは限らない。今回の事件を受けて即座に思い出されるのが2003年9月10日に起きたスウェーデンのアンナ・リンド外相刺殺事件である。同年9月14日に同国のユーロ導入を問う国民投票を控えていたところ、導入賛成派の旗手であるリンド外相が買い物中に刺され、死亡に至ったという事件である。元より、反対派が賛成派を大きく上回る情勢が続いていたが、この事件をきっかけとして同情票を取り込む賛成派が支持を伸ばし、逆転勝利するのではないかとの思惑が強まった。だが、最終結果は賛成が42.0%、反対が55.9%となり、大差で反対派が勝利し、議員殺害を経て

も尚、スウェーデン国民における通貨ユーロへの疑念が深いものであることが確認された。

一方、今回の英国のケースに関しては、スウェーデンのケースに比べて賛成・反対が拮抗しているため、同情票で覆る芽はある。しかも、本質論として、スウェーデンが自国通貨スウェーデン・クローナを捨てるデメリットと比べれば、英国がEUに残るデメリットの方が明らかに分かりにくい(言い換えれば、スウェーデンがユーロを導入するメリットと比べれば、英国がEUに残るメリットは明らかに分かりやすい)。離脱派はEUの一員であることが移民流入や景気停滞の理由であるかのように主張するが、例えば移民の受け入れに関して英国は義務的受け入れ枠の議論で特例措置を受けているし、EUへの予算拠出も所詮、名目GDP比でわずか1%の話である。ギリシャを筆頭として債務危機を巡る混乱が苛烈を極めた局面でも、通貨ユーロ加盟へのオプトアウト権限を持つ英国は傍観者だった。むしろ、離脱した場合は、欧州大陸と諸々の制度的調和が取れなくなり、英国を拠点とする民間企業や金融資産が英国外へ流出する可能性及びデメリットの方が大きそうである¹。

アンナ・リンド外相刺殺事件はスウェーデン国民投票の大勢に影響を与えなかったが、ジョー・コックス議員殺害事件は英国国民投票の行く末を変える可能性を孕んでいるように思われる。

～国民投票後の英国世論～

周知の通り、国民投票での否決から13年が経過した今もスウェーデンはユーロを導入していない。現役閣僚が殺されても(大差で)覆らなかった世論だけに、何度問うても結果は変わらないという諦観もあるかもしれない。また、その13年の間にユーロにはろくな話がなかったという事実も影響しそうである。特に、過去5年のユーロ圏の状況を踏まえればユーロに入りたいと思う方が奇特であり、当時の賛成派の気も変わっている可能性がある。片や、今回の国民投票で英国の残留派が勝利した場合、「議員殺害のはずみで勝利しただけ」というしこりは残る(事実として事件を境に逆転しているのだから)。スウェーデンのケースに比べて賛否が拮抗しているからこそ、余計にそのような流れになりやすい。残留派の勝利は辛うじてではなく、圧勝であってこそ、後顧の憂いを断てるだろう。

では、離脱派が勝利した場合、スウェーデンのケース同様、同情票でも覆らなかったとの解釈から、英国のEU再加盟の世論は永遠に封印されるのだろうか。筆者はそう思わない。上述の通り、スウェーデンがユーロを導入するメリットと比べれば、英国がEUに残るメリットは明らかに大きい。離脱となった場合、通商上の不利益や資本流出を背景として実体経済が下押しされ、時と共に「あの頃はよかった」とのムードが強まってくる可能性は否めない。最も象徴的なタイミングとしては2020年5月に行われる下院総選挙で離脱という選択の適否が争点になりかねない。だが、一度抜けても直ぐに戻れるという前例はEUにとって最悪であり、再加盟の障壁は相応に高く設定されるはずである。結局、国民投票がどちらに転んでも、英国とEUの関係は難しい状況が続くそうである。

国際為替部
チーフマーケット・エコノミスト
唐鎌 大輔(TEL:03-3242-7065)
daisuke.karakama@mizuho-bk.co.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

¹ 詳細は本欄2016年6月15日号『英国のEU離脱(Brexit)を巡るQ&A』をご参照下さい。

バックナンバーをご希望の方は以下のサイトからお取り頂くことも可能です

<http://www.mizuhobank.co.jp/forex/esgn.html>

発行年月日	過去6か月のタイトル
2016年6月17日	週末版(日銀金融政策決定会合を終えて～「No」と言う勇氣と奇襲の「ツケ」～)
2016年6月16日	FOMCを終えて～「利上げの有無」を超えて～
2016年6月15日	英国のEU離脱(Brexit)を巡るQ&A
2016年6月14日	ドル/円相場、水準感の整理～攻守交代の時～
2016年6月10日	週末版(7月以降、ECBは現状維持を貫けるか～戻らないHICPIに苦しめられる公算～)
2016年6月9日	日銀金融政策決定会合プレビュー
2016年6月8日	円相場の基礎的需給環境について
2016年6月7日	イエレンFRB議長講演と米雇用情勢について
2016年6月6日	米5月雇用統計～もはや正常化以前の問題か～
2016年6月3日	週末版(ECB理事会を終えて～2周年を迎えたマイナス金利～)
2016年6月2日	消費増税先送りと「悪い円安」論について
2016年6月1日	年内「最後の円安」に備える時か
2016年5月30日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2016年4月分)
2016年5月27日	週末版(本日のトピック:ECB理事会プレビュー～目玉政策を控えて現状維持～)
2016年5月26日	投機ポジションにおける「ドル買いの正体」
2016年5月25日	米通貨・金融政策の捻じれ～「ドル高の罠」から抜けられず～
2016年5月23日	仙台G7を終えて～論点変わらず見通しに影響なし～
2016年5月20日	週末版
2016年5月18日	本邦1～3月期GDP～「不都合な結果」とはならず～
2016年5月17日	ECBのバランスシートとユーロ相場との関係などについて
2016年5月16日	消費増税先送り報道と市場への影響などについて
2016年5月13日	週末版(マイナス金利導入から3か月～外的要因に圧倒される状況続く～)
2016年5月12日	円相場の基礎的需給環境について～第1四半期を終えて～
2016年5月11日	伊勢志摩合意に必要なドイツの説得
2016年5月9日	薄れる米雇用統計の影響力～「量」と「質」の捻じれも懸念～
2016年5月6日	週末版(米為替政策報告書と「秩序的(orderly)」)について～結局はドル高が辛くなっただけ～)
2016年4月28日	日銀金融政策決定会合～「良い球」を逃した結末は……
2016年4月26日	週末版(FOMCを終えて～論点は変わらずドル高懸念～)
2016年4月25日	「原油価格上昇&円安」をどう考えるべきか？
2016年4月22日	3週間ぶりの111円台を受けて～想定通りの円安～
2016年4月21日	週末版(ECB理事会を終えて～「不都合な真実」を黙殺したドラギ総裁～)
2016年4月20日	日銀金融政策決定会合プレビュー～日銀版TLTRO2か～
2016年4月19日	ECB理事会プレビュー～強まる日本化・円化・日銀化～
2016年4月18日	G20を終えて～追加緩和、「やるなら今」か？～
2016年4月15日	週末版(黒田総裁NY講演を受けて思うこと～「最凶の緩和スキーム」にならないために～)
2016年4月14日	ドル高、金利上昇に脆弱な米経済の現状
2016年4月13日	通貨安競争回避で最も分が悪いユーロ圏(≒ドイツ)
2016年4月12日	敢えて探す円安材料と国際的文脈の踏まえ方
2016年4月11日	円高を巡るQ&A～よくある照会の論点整理～
2016年4月8日	週末版
2016年4月7日	FOMC議事要旨(3月15～16日開催分)
2016年4月6日	ドル/円相場、110円割れの読み方
2016年4月5日	深まるユーロ圏のデフレーションとユーロ高懸念
2016年4月4日	QQE3周年と海外の反応～米国講演を踏まえて～
2016年4月1日	週末版
2016年3月28日	日銀、「5分で読めるマイナス金利」に思うこと
2016年3月25日	週末版
2016年3月24日	ユーロ相場、再考～実質金利、PPP、実質実効為替相場～
2016年3月23日	ブリュッセルテロを受けて～目立つ英ポンドの動揺～
2016年3月22日	ユーロ圏経常黒字とユーロ相場の近況について
2016年3月18日	週末版(過去2か月のG3通貨相場から言えること～基礎通貨には逆らえず～)
2016年3月17日	FOMCを終えて～やはり「2回出来れば御の字」の米利上げ～
2016年3月16日	日銀金融政策決定会合について～際立つECBとの対比～
2016年3月15日	TLTRO2に関するQ&A～侮れない、その実力～
2016年3月14日	求められる、市場期待に対して「No」と言う勇氣
2016年3月11日	週末版(ECB理事会を終えて～悔やまれる満点回答～)
2016年3月10日	日銀会合プレビュー～「Mr.Kurodaは気にしない」のか？～
2016年3月4日	週末版
2016年3月3日	今年が「円高の年」なら、まだ底は深い～過去30年の経験則～
2016年3月2日	ECB理事会プレビュー～注目すべき論点の整理～
2016年3月1日	上海G20、為替見通しへのインパクトについて
2016年2月26日	週末版(筋が通らない日中に対する通貨安批判～まずはFRBの政策修正が筋～)
2016年2月25日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2016年1月分)
2016年2月24日	英国のEU離脱に係る論点整理
2016年2月22日	中国版プラザ合意へ燃える期待について
2016年2月19日	週末版(ECB理事会議事要旨(1月21日開催分)を受けて～「保険」≒「混乱の種」という皮肉～)
2016年2月16日	マイナス金利で円高は「不幸中の幸い」？
2016年2月12日	週末版(やはり始まった購買力平価への回帰～最終的に報われる為替予測とは～)
2016年2月10日	弱まる「期待への働きかけ」と為替相場の関係
2016年2月9日	円の需給環境の総括と展望～15年国際収支を受けて～
2016年2月8日	米1月雇用統計を受けて～成熟化への不安～
2016年2月5日	週末版(マイナス金利決定から1週間を終えて～早くも心配される「本当のマイナス金利」～)
2016年2月4日	「終わりの始まり」が近づくFRBの正常化プロセス
2016年2月3日	円安ドライバーとしては役不足な日銀マイナス金利
2016年2月2日	日銀の追加緩和が可能だった理由
2016年2月1日	日銀マイナス金利政策導入を受けて～逐次投入体制～
2016年1月29日	週末版
2016年1月28日	FOMC(1月26～27日開催分)を受けて
2016年1月27日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2015年12月分)
2016年1月26日	ドラギ総裁講演について～崩れるインフレ期待の「壁」～
2016年1月25日	日銀金融政策決定会合プレビュー～静観する勇氣～
2016年1月22日	週末版(ECB理事会を終えて～2連敗は避けられるか？～)
2016年1月21日	円相場の調整余地を探る～試される日銀～
2016年1月20日	ユーロ相場を巡る最近の証券投資フローについて
2016年1月19日	ECB理事会プレビュー～ECB版の補完措置へ向けて～
2016年1月18日	「あく抜け」に求められるもの～人民元の完全フロート化～
2016年1月15日	週末版(ECB理事会議事要旨について～ドラギマジック、「初の黒星」の舞台裏～)
2016年1月14日	厳しくなってきたFRBの「瘦せ我慢」
2016年1月13日	本邦11月国際収支統計と円相場の需給について
2016年1月12日	Game changer! にならなかった米12月雇用統計
2016年1月8日	週末版(中国外貨準備減少の正しい読み方～トリレンマの「総取り」はいつまでも出来ない～)